

寝場所と支援実態からみたホームレスを取り巻く現在の環境

—福岡市を事例として—

池田 慎太郎

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と目的

全国的にホームレス（以下 HL）の数は減少傾向にあり、厚生労働省の概数調査¹⁾によると、2003 年の 25,296 人をピークに、2018 年には 4,977 人にまで減った（図 1）。これは、HL 自立支援法に始まる行政側の支援施策や各地域の民間団体の支援活動の結果であろう。一方、近年減少率が低下しており、現在の HL を取り巻く環境を再考する必要があると考えられる。

そこで、本研究は、福岡市をケースに HL⁽¹⁾の現在の寝場所や生活実態を把握し、都市部の HL を取り巻く環境の一端を明らかにすることを目的とする。

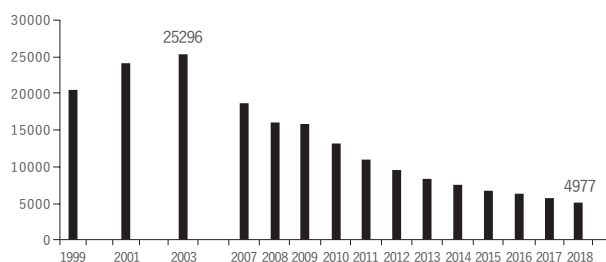


図 1 国内の HL 数の推移（参考文献 1）を元に筆者作成

1.2. 研究の構成と方法

2 章では筆者によるフィールドワークの結果から HL の生活実態を把握する。3 章では過去に実施された調査の結果を 2 章の結果と比較し、生活実態の変化を明らかにする。4 章では支援団体へのヒアリングと文献調査により、HL に対する支援制度の変遷と民間支援の現状を整理し、5 章で総合的考察を行う。

フィールドワークは、福岡市内広域で活動する民間の HL 支援団体「NPO 法人ホームレス支援福岡おにぎりの会」（以下おにぎりの会）のアウトリーチ型の物資支援に筆者が参加する中で行い、2017 年 10 月 6 日から 2018 年 4 月 6 日にかけて、夜間に市内の HL 111 名と面会した。また、支援に関するヒアリングは、おにぎりの会事務局に対し 2017 年 10 月 6 日に行った。

1.3. 既往研究の整理と本研究の位置付け

HL の生活実態については、杉友ら（1999）²⁾が都市公園内での HL の場所占有のメカニズムを明らかにしている。また、HL の排除については、土肥ら（2010）³⁾が都市内の HL の寝場所の移動履歴と排除の実態およ

び両者の関係を考察している。

さらに、福岡市内の HL の生活実態については斎藤（2001）⁴⁾、（2002a）⁵⁾が調査・整理を行っている。

このように、HL を取り巻く環境については、占有や移動等の HL の行動に着目したものや、排除等の HL への社会の対応に関するものが多い。本研究では、HL の寝場所に加え、支援団体の動きを整理することで、物理的・社会的に HL の環境を明らかにする。

1.4. 市の支援施策の方針転換による概数の減少

厚生労働省の概数調査^{再1)}によると、福岡市は 2008 年から 2009 年にかけて、全国の特別区または政令指定都市のうち東京、大阪市に次ぎ、3 番目に HL の多い都市となった。これは、2009 年まで福岡市が生活保護申請に住民票の提示を条件としており、住所を持たない者が申請できない状況が続いたためである⁽²⁾。

同年にその方針が転換され、市は住宅確保を促進させるべく、申請に住民票を不要とした^{再(2)(3)}。

この方針転換により、住所を持たない人の住宅確保、また、公的扶助の受給が促進され HL の概数が激減した^{再(2)}。福岡市の HL の概数は 2009 年の 969 人をピークに、2018 年には 171 人と報告されている（図 2）。

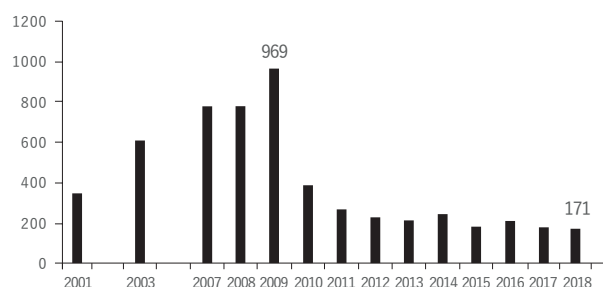


図 2 福岡市の HL 数の推移（参考文献 1）を元に筆者作成

2. 寝場所の実態

本章では、フィールドワークの結果から寝場所の実態を分析する。さらに、HL へのヒアリングの結果から生活実態と寝場所との関係を考察する。

2.1. 寝かたによる分析

本節では HL の寝場所を、その安定性と立地特性により分析する。分析にあたり、寝場所の空間占有の時間の長さを常設と仮設で分け⁽⁴⁾、既存構造物との対応関係について独立か依存かで分けた（表 1）。さらに、

面会したHLを寝かたで分類し、設え、人数、性別、年齢層、寝場所の所在地等を一覧で示した(表2)。
ただし、38名は寝かたが不明であった。

独立常設型は13名確認された。公園・緑地のみに見られ、設えは木造シート貼の小屋⁽⁵⁾が主であった。

依存常設型は8名確認された。その寝場所は橋梁下や既存建築物の軒下等であり、屋根や壁として用いられていた。設えは木造シート貼の小屋^{再(5)}やキャンプ用テント、ダンボールの衝立、傘等であった。

独立仮設型は4名確認された。彼らは特定の寝場所を持たず、一時的に公園や広場のベンチに寝ていた。

表1 4つの寝かた(筆者作成)

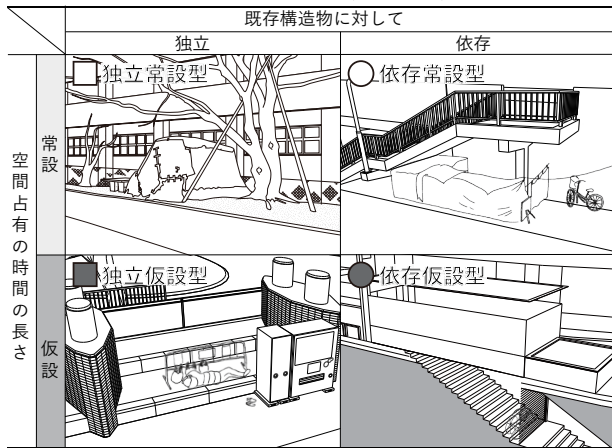


表2 面会したHLの寝かたと属性(筆者作成)

寝かた	依存先	設え	人数	性別	年齢層	寝場所の所在地	面会日	
独立常設型 (13名)		自作小屋	2	男	高齢		2017/11/3	
			5	男	高齢		2018/1/12	
			1	男	高齢		2018/2/16	
			1	男	高齢		2018/1/19	
			1	女	高齢			
			1	男	中年			
			1	男	高齢			
			依存常設型 (8名)	橋	自作小屋		1	男
キャンプ用テント	1	男			高齢	2017/11/3		
傘、布団	1	男			高齢	2018/3/19		
不明	1	男			高齢	2017/11/3		
建物軒	寝袋	1		男	高齢		2018/2/16	
		1		男	中年		2018/2/2	
		1		男	高齢		2017/11/3	
		1		男	高齢		2018/2/2	
加ハート	不明	1	男	高齢		2017/10/6		
独立仮設型 (4名)		なし (衣類・毛布)	1	男	青年		2018/10/6	
			1	男	中年			
			1	女	高齢			
			1	男	高齢			
依存仮設型 (50名)	地下通路	不明	14	男	高齢		2018/1/26	
			7	女	高齢			
			2	男	中年			
			9	男	高齢			
	建物軒	傘、寝袋	1	男	中年			2017/12/22
			2	男	高齢			
		自作衝立、傘	1	男	高齢			2018/2/2
			1	男	青年			
		寝袋	1	男	青年			2017/10/6
			1	男	中年			
		不明	3	男	高齢			2018/1/19
			1	男	高齢			
		不明	1	女	高齢			2017/11/3
			1	女	青年			
シェルター	寝袋	1	男	青年	2018/1/5			
		1	男	中年				
橋	寝袋	3	男	中年	2017/12/22			
		1	男	中年				
ガードレール	寝袋	1	男	中年	2017/12/8			
		1	男	中年				
不明 (38名)	不明	不明	1	男	高齢		2017/11/3	
			1	男	高齢			
			12	男	中年			
			23	男	高齢			
			1	男	高齢			
			1	男	高齢			

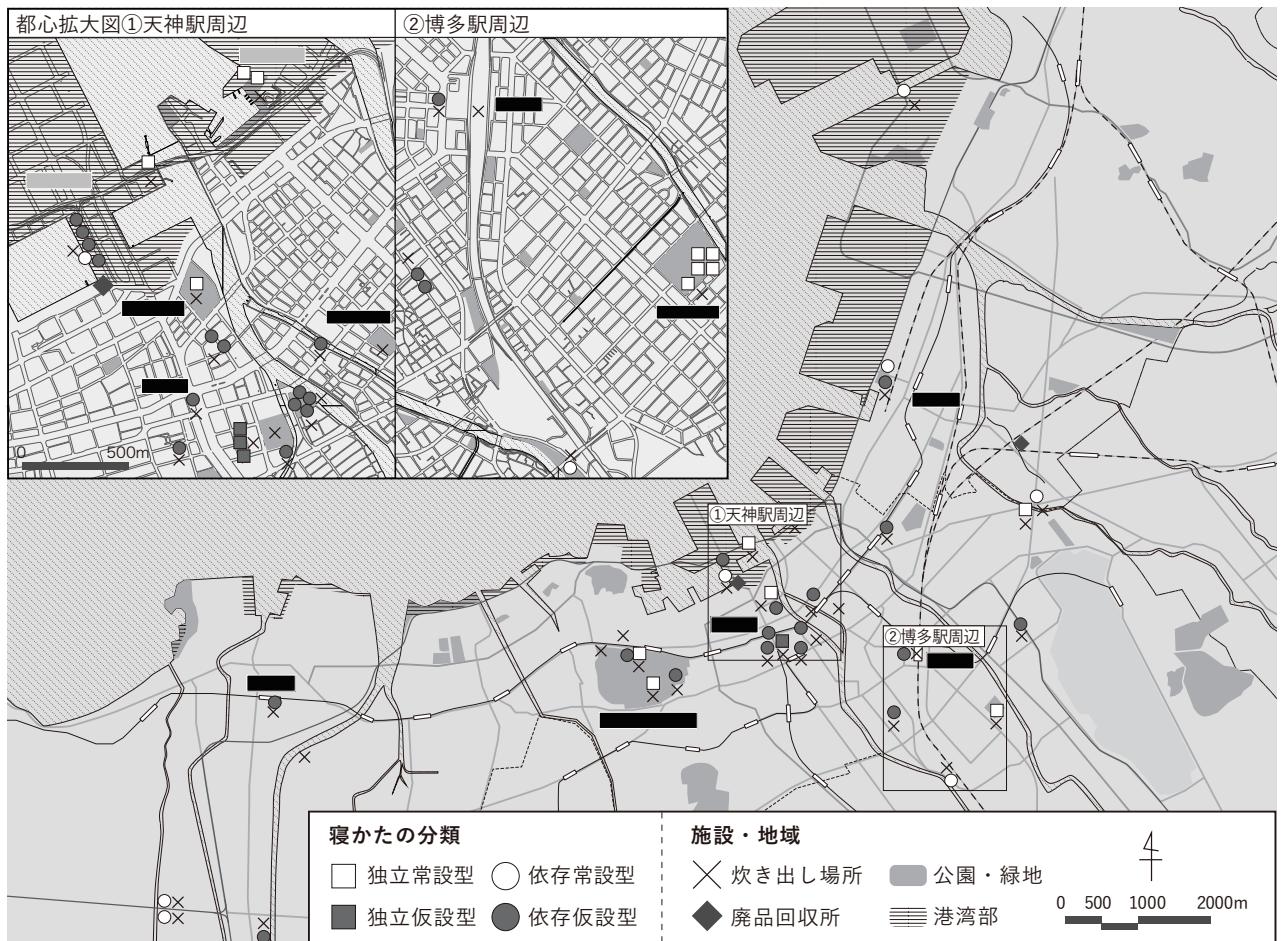


図2 寝場所の分布(地図は基盤地図情報のトレース)(凡例・公園名・駅名筆者作成)

その設えはなく、毛布を纏うか衣類のみであった。また、そのうち2名は支援者との意思疎通が難しく、面会時に本人の意思を確認することができなかった。

依存仮設型は50名確認された。その寝場所は夜間閉鎖後の地下鉄や地下街の出入口といった地下通路と、既存建築物の軒下空間で大半が占められ、屋根や壁として用いられていた。設えは傘、衝立等であった。

以上により次のことが推測される。まず、常設型は比較的頑丈な設えであり、その半数以上が公園に立地する。次に、仮設型は比較的簡易な可搬性のある設えであり、その約6割が地下通路に存在する。また、独立型は主に公園や広場に存在し、依存型はその半数以上が地下通路を寝場所としている。

2.2. 寝場所の分布

HLの寝場所を、目視とHL本人へのヒアリングにより、計48箇所把握した(図2)。本節ではそれらを公園・緑地と港湾部、都心部に分け、特徴を整理する。

まず、舞鶴公園や須崎公園等の公園・緑地では、樹木や茂みが人の往来のある通りからの目隠しになる場所が選ばれていた。また、その大半から、その場所に10年以上定着して暮らしているとの回答を得た。

次に、須崎埠頭や博多埠頭、箱崎埠頭等の港湾部では、公園・緑地と同様に、樹木のある緑地帯が選ばれていたほか、岸壁や上屋の軒下も利用されていた。

最後に、天神や博多といった都心部では、広場内のベンチや段差に加え、夜間閉鎖後の地下鉄や地下街の出入口、建物の軒下等が利用されていた。ヒアリングの結果、寝場所の決定理由に、日雇いの送迎場所との近接があることがわかった。

以上により、人の立ち入りが少なく外からの視線が届きにくい寝場所が都市部の様々なエリアで選ばれる傾向にあると推測される。

2.3. 寝場所と生活の関係

本節ではHL本人へのヒアリングの結果から、HLの寝場所と生活との関係を考察した。

まず、港湾部では廃品回収所や日雇いの仕事場、都心部では日雇いの送迎場所との近接を理由に寝場所を選ぶ者が複数確認された。そのため、直接的・間接的な職住近接の存在が考えられる。ちなみに、HLの生活資金源には、年金、廃品回収や日雇いの仕事で得た賃金等が挙げられた。次に、公的扶助を受給しておらず、受けるつもりがないHLが常設型に5名確認され、仮設型には見られなかった。また、常設型HLの中には食料を自給する者がいることが確認された。これらから、常設型のHLは福祉制度に頼らず生活する

意思をもつ傾向にあると考えられる。最後に、仮設型のHLに、冬季の寒さの厳しい日にはネットカフェや知人の家を利用する者が確認された。これは、仮設型の寝場所の流動性の一端を示していると考えられる。

3. 過去の調査結果との比較

本章では、齋藤(2001)^{再4)}が2000年6月16日・17日と12月9日・10日に、また同(2002a)^{再5)}が2001年7月30日・31日に実施した、福岡市内のHLの生活実態調査の結果を前章の結果と比較し、その変化について整理した(表3)。

3.1. HLの属性的変化

男性の割合は2001年において94%⁶⁾を占め、本調査では約90%を占めた。また、高齢者の割合は2001年に41%^{再6)}を占め、本調査では75%を占めた。

3.2. 都心部の駅空間における寝場所の変化

2000年12月において、都心に位置する博多駅と天神駅のコンコースを寝場所とするHLの数はそれぞれ45名、13名と報告されている。それに対し本調査では、駅構内に寝場所は見られず、夜間閉鎖後の入口や階段等の通路空間にのみ寝場所が確認された。

3.3. 寝場所の材料と常設型の数の変化

2000年6月と2001年に確認された寝場所の種類には、シートテントやキャンプ用テント等、現在にも共通して見られるものと、ダンボール小屋のように現在では確認されないものがあつた。

また、2000年には常設型テントの数が調査されており、6月には須崎公園に9箇所、冷泉公園に4箇所、また12月には冷泉公園に14箇所確認されている。それに対し本調査では、常設型の寝かたは上記の2つの公園のうち須崎公園に1箇所見られるのみであった。

表3 過去の調査結果との比較(参考文献4)5)を元に筆者作成)

	過去の調査(2000年6月、12月、2001年7月)	本調査(2017年10月~2018年4月)
男女比	男性94%、女性6%(2001年7月)	男性90%、女性10%
高齢者	全体の41%(2001年7月)	全体の75%
都心	駅のコンコース内外が寝場所(2000年12月)	駅構内が寝場所となくなる 駅前広場や通路のみ利用が確認
須崎公園	常設型テントが9箇所(2000年6月)	常設型小屋が1箇所
冷泉公園	常設型テントが4箇所(2000年6月)、 常設型テントが14箇所(2000年12月)	常設型無し
常設型寝場所の種類	①シートテント(2000年6月、2001年7月) ②キャンプ用テント(2000年6月) ③ダンボール小屋(2000年6月)、 ダンボールハウス(2001年7月) ④小屋(2001年7月)	①、②、④は確認 ③は未確認 (ダンボールが見える外観のものは無し)
仮設型寝場所の種類	⑥行き倒れ(共通) ⑦ごろ寝(共通) ⑧ダンボールベッド、ダンボールの寝床(共)	⑥、⑦、⑧は確認

4. 福岡市の民間HL支援の実態

本章では民間団体によるHL支援の実態を整理した。代表的な支援内容として物資支援と居住支援について取り上げ、さらにおにぎりの会の運営する行事に

についても触れる。

4.1. 民間による物資支援

2018年11月現在、物資支援は市内に分散して行われている。その活動形式はアウトリーチ型と炊き出し型に大別される。アウトリーチ型はHLの寝場所に直接訪問し、物資の受け渡しを介して安否や健康状態の確認をするものであり、炊き出し型は市内の比較的大きな公園の一角を炊き出し場所として一時使用するものである。それらは主にボランティアにより実施される。おにぎりの会はこの両方を兼ねている。他にも市内の複数の団体が、炊き出し型の物資支援を展開している。炊き出しは月曜日と土曜日を除いてほぼ毎日行われており(表4)、団体の活動を重複させないことで物資受給の機会を極力増やす工夫が見られる。

おにぎりの会は、食料と併せて生活用品や広報等を提供している。広報には催事予定や天気予報、市内の炊き出し場所等、情報弱者であるHLのライフラインとなる情報が載せられている。

表4 2018年2月の物資支援の実施状況(脚注(7)を参照し筆者作成)

頻度	時間帯	場所	物資の内容	主催者
第1月曜日	18:00～	博多区	炊き出し	老人ホーム
毎週火曜日	13:00～13:30	博多区	食事、衣類	NPO法人
毎週水曜日	11:00～	中央区	弁当	労働組合
	16:00～	博多区	パン	教会
毎週木曜日	14:00～	博多区	パン	市民の会
	16:00～	博多区	おにぎり等	労働組合
毎週金曜日	16:30～	博多区	パン	教会
	21:00～	巡回配布	おにぎり、豚汁、衣類	NPO法人
毎週日曜日	13:15～	中央区	弁当、コーヒー	教会
第4日曜日	15:00～	中央区	パン、コーヒー	教会

4.2. 民間による居住支援

民間による市内の居住支援には、居住移行支援や自立後の居宅訪問がある。代表的な団体として「社会福祉法人グリーンコープ抱樸館福岡」(以下抱樸館)、「福岡すまいの会」、おにぎりの会が挙げられる。

抱樸館は、居住を希望するHLに対し、就労支援を受けることを条件に約半年から1年間の期限付きで部屋を無料で貸し渡し、食事や風呂を提供している。また、おにぎりの会は現在新規の居住支援を行っていないが、同会による居住支援を通じて自立した元HLの家を訪問し、健康状態の確認等を行っている。

4.3. 行事の開催

おにぎりの会では年に3回、須崎公園でHL向けに行事が開催されている。そのうち2回は、越冬期と呼ばれる寒さの厳しい季節(12月から3月上旬)に開催される。その内容は炊き出しに加え、冬物の衣類提供、医師による診察や薬の処方、司法書士による法律相談なども含まれる。つまり、HLの冬季の健康の維持や病気の予防・回復に加え、本人の抱える社会的問

題の把握や解決の機会といえる。

5. 都市部のHLを取り巻く環境

5.1. HLの寝場所の変化

2000年～2001年に見られた常設型ダンボール小屋が現在見られないことから、HLの寝かたが、小屋と寝袋に代表されるように、強固で安定的な設えと流動的で不安定な設えに明確に分離したと考えられる。

また、現在人目の少ない場所が利用されていたことと、寝場所が都心の駅構内や公園・緑地から撤退したことから、都市部の公共空間において、HLの寝場所の不可視化が進行したといえる。

5.2. 自己申請方式の支援の限界

公園に長期定着するHLや、福祉制度に頼る意思を持たないHLが確認されたことから、現状の自己申請方式の支援には限界があるといえる。

また、仮設型のHLのうちに口頭での意思疎通が困難な者が確認されたことから、気候の厳しい季節に行き場を失うHLが存在する可能性が示された。

5.3. おわりに

HL支援を行う現在の民間団体には、おにぎりの会のように、HLとの接触の機会を高い頻度で確保し、支援団体とHLとの関係維持による長期的な見守りやフォローアップを図るものが見られた。HLの中に長期定着する者や支援を希望しない者などが一定数確認されたことを考慮すると、今後の支援には、HLの主體的な行動を待つだけではなく、HLと直接交流し長い時間をかけて信頼関係を構築することが重要であると考えられる。

謝辞

本研究の調査は、おにぎりの会の全面協力によるものである。長期にわたり活動に参加する形で調査させていただいたことを、この場を借りてお礼申し上げる。

注

- (1) 本稿におけるHLとは、これまでの概数調査の対象と同様、屋外空間を起居の場所とする人を指す。
- (2) おにぎりの会によるヒアリング回答(2017年10月6日)
- (3) この経緯には、学識経験者やNPO法人、医療関係者等で構成された「なくそう貧困!福岡県民実行委員会」が関与しており、同年3月に同会が主催した生活・雇用・医療に関する相談会や、HL向けの住宅確保を市に要請したことが影響したとされる。
- (4) 本稿では常設とは空間占有が2晩以上継続する状態を指し、仮設とはそれが1晩ごとに解消される状態を指す。
- (5) 小屋のつくりは、面会した際に入口から中を見て確認した。木材を釘で固定し、それをパネルやシートで覆う構造のものが複数見られた。
- (6) 2002年の齋藤の調査では市内のHL108名から回答が得られている。
- (7) おにぎりの会の広報紙「おにぎりだより」425号の炊き出し情報より

参考文献

- 1) 厚生労働省、ホームレスの実態に関する全国調査(概数調査): <https://mhlw.go.jp/toukei/list/63-15.html> (2018年11月1日最終閲覧)
- 2) 杉友ジョージ他(1999)「ホームレスによる公園占用の実態とそのメカニズムに関する研究: 都立戸山公園のホームレスを事例に」、日本建築学会計画系論文集、517、pp215-222、1999.3
- 3) 杉田早苗、土肥真人他(2010)「川崎市におけるホームレスの寝場所の移動と排除に関する研究」、日本都市計画学会都市計画論文集、No.45-3、pp751-756
- 4) 齋藤輝二(2001)「ホームレスの居住と人権に関する研究 その1、福岡市都心の実態調査より」、日本建築学会九州支部研究報告第40号、pp141-144
- 5) 齋藤輝二(2002a)「ホームレスの居住問題と支援に関する研究 その3、福岡市内108人の路上生活者の面接調査より」、日本建築学会九州支部研究報告第41号、pp145-148